



## 第2回 論語指導士 吉田敏治（第七十四号）東京都

「礼を知り、礼に抛りたい。」

-----これからの社会に活かしたい論語の言葉-----

これからの人々は、思慮深く生きなければなりません。このため、『論語』の八いつ篇に現れる「礼とは何かを知り、礼を探究し、礼を実践する。」姿勢が参考になるでしょう。

まず、礼とは何かを知る。「人にして不仁ならば、礼を如何せん。」すなわち、礼は人格の発露であり、このことは時代を問わない大前提です。その上で、「礼は其の奢らんよりは、寧ろ儉せよ。」すなわち、余裕がない人がルールどおりにできなくても仕方がないとするもので、これからはますます、形式に流れないで弱者をいたわり多様性を認める必要があるでしょう。

さらに、「上に居りて寛ならず、礼を為して敬せず、喪に臨んで哀しまずんば、吾何を以て之を觀んや。」すなわち、強い立場の人は言動に歯止めを持つべきだし、また場面に応じて自然に真情が現れることが大事であり、私たちはそのような「本音社会」を築いていきたいものです。

また、礼を探究する。「夏の礼は吾能く之を言えども、杞徴するに足らざるなり。殷の礼は吾能く之を言えども、宋徴するに足らざるなり。文献足らざるが故なり。」すなわち、ひととおりの知識だけで決定することは危険です。未知の病と闘い、手探りで社会を再構築するため、根拠に基づく判断を積み重ねましょう。その上で、「周は二代に監ぶれば、郁郁乎として文なるかな。吾は周に従わん。」すなわち、根拠ある判断をしたら、知識整理で満足せずその価値を世に広めることが大事です。

最後に、礼を実践する。「祭れば在すが如し。神々を祭れば神々在すが如し。」そして、「吾祭りに与らざれば、祭らざるが如し。」すなわち、礼は愚直に執行するものであり、それ自体のうちに価値があるでしょう。これは宗教行事の例ですが、意義はあらゆるイベントに通じます。人々が去ってしまった空間に人々を呼び戻すことは容易ではありませんが、愚直さのみが道を開きうるでしょう。その上で、「子太廟に入りて、事毎に問う。」ことは、「是れ礼なり。」すなわち、愚直な礼の執行はときにネット上で人に笑われますが、そういうことは気にせずにいましょう。それよりも、自分にそれなりの立場ができたために格好をつけて知ったかぶりをすることは危険であり、社会の再構築を妨げかねません。

以上をまとめますと、これからの時代と社会において「本音で生きる、根拠に基づき判断し前進する、愚直に執行する。」という姿勢を最重要とし、このことを提言とするものです。



## 「加地伸行からの百字答礼」

論語指導士 吉田敏治様へ。

礼を重んじてゆこうとされる御姿勢、素晴らしいですね。もともとは、人間社会における行事、人間関係を円滑にする約束ごとが礼です。この礼には、人間とは何かという本質が蔵されています。ぜひお深めください。